

野上弥生子著

私の中国旅行



岩波新書

338

野上弥生子

1885年東京に生まれる
1907年明治女学校卒業
1938～9年外務省嘱託として欧
州諸国へ出張
現在一作家
著書—「ギリシア・ローマ神話」
「真知子」「迷路」(以上、岩
波文庫)ほか

私の中国旅行

岩波新書(青版) 338

昭和34年2月17日 第1刷発行 ©

¥ 100.

著 者 の が む や え こ
 野 上 弥 生 子

東京都千代田区神田一ツ橋2-3

発 行 者 岩 波 雄 二 郎

長野市中御所2-30

印 刷 者 田 中 重 彌

発行所 東京都千代田区 株式 岩 波 書 店
 神田一ツ橋2-3 会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします 大日本法令

まえがき

一九五七年の初夏、私が中国を訪ずれたのは中国対外文化協会、ならびに中国作家協会の御招きによるものであった。一度親しく中国を見ることは長いあいだの念願であっただけに、おもいもよらず、それを果す機会が与えられたのみならず、滞在中に受けた、まことにいいようもないほどの行きとどいた厚情と善意は、おそらく私の一生の追憶となるものであり、ここに改めてここからの御礼を申しあげておきたい。

正しくいえば、中国の土を踏んだのは今度がはじめてではない。一九三八年の海外旅行の途次、私は上海と香港をのぞき見たが、当時日中の関係はすでに不幸な状態にあった。私はチエスフィールド公園に出掛けた時のことを忘れない。そこに媒姆に連れられて遊んでいた幼稚園の子供たちが、私たちを眼にするや否や——軍服のひとと交っていたのではあるが——なにか怖いものが現われたかのように、急にどこかに隠れてしまった。私はこんな悲しい光景を見ないですむ状態に一日も早くなるのを念じたものである。またその二、三年まえ、台湾の旅において逢ったいわゆる本島人のひとびとが、私の家は広東であるの、また福建であるのと語る

調子に、ちょうど私たちが生れ故郷を青森県であるの、長野県であるのというのにそっくりなのに、複雑な感銘を受けたのもいまだに忘れえない。日本の、むしろ一般の植民政策なるものに対して、私なりの素朴な疑惑をもちはじめたのは、この旅行が与えた一つの実感だといつてよい。同時に私は朝鮮、満州をぜひ見なければならぬと考えた。この願いは終に戦争で沮まれたわけになるが、しかもその戦争の本質を私に見あやまらせなかったのは、いい方をかえれば、当時の軍部の行動に対してはじめから否定的にさせた原因の一つには、この実感が強く作用している。それとて、否定もたんに観念的な抵抗にとどまったのは恥しいが、無力ながらにもこの態度が守れなかったなら、いかに中国の寛大な御招きがあったとしても、それに応ずるほど厚顔にはなりえなかったであろう。

さて、こんなおもいで漸く訪ねることのできた中国において、私はなにを見、なにを感じたか。新書版のこの些やかな書物は、それに対する返答の一部だといいたい。私の限定的ないい方は、ここに書いた土地のほかにもなお数カ所を経めぐったので、それについて語りたいことは、いろいろな理由から他日にゆづったためである。また今にして考えると、私はあまりにねんごろに扱われすぎたかも知れない。北京で与えられた胡同の家では、李初黎さんに、こんなところにおいては現在の中国はわからない、と叱られたものであった。まことにあの邸宅の代り

に一般のアパートか、それよりも貧しい民家にでも住んだら、私の眼にはもっと異った種々相が映ったに違いない。しかしまたいえば、そこに身をおかなければ見られなかった中国を、それによって見たことになる。同時にこれは解放後八年にすぎなかった中国には、生活的にまだいろいろな面や層が交りあっているのを示すものであり、いっぽう世界に比類ない古典美を保ちながら、他方ではイデオロギー的にもっとも新しい国家建設の中核となつて、はつらつたる生命力に満ちあふれた北京、しかも揚子江に二重の鉄橋をわたし、武漢郊外には魔法のような工業都市を現出させる実力を誇示しながら、家々の台所はガスの設備さえ急がず、豆炭や煉炭の炊事であえて甘んじている首都のこれらの姿は、なにを造るにも経なければならぬさまざまなものを、いかにも賢く、また気長に乗りこえて行こうとする「過程」の、象徴の一つとされないであろうか。

私の旅行もすでに一年と数ヵ月まえのことになった。人民公社、製鉄の飛躍、穂のうえに赤ん坊を載せてもへこまないほど厚いという稲の増産。最近のかかるニュースは、仿膳の会食の際陽詡笙さんと明の十三陵について語りながら、命ながらえてもう一度いつか中国を訪れる時があったら、現在の中国も一種考古学な存在になるかも知れない、と考えたのを思い出させる。これはいくぶん文学的な空想であるにしろ、二年足らずのあいだにも中国はまことにい

に一般のアパートか、それよりも貧しい民家にでも住んだら、私の眼にはもっと異った種々相が映ったに違いない。しかしまたいえば、そこに身をおかなければ見られなかった中国を、それによって見たことになる。同時にこれは解放後八年にすぎなかった中国には、生活的にまだいろいろな面や層が交りあっているのを示すものであり、いっぽう世界に比類ない古典美を保ちながら、他方ではイデオロギー的にもっとも新しい国家建設の中核となつて、はつらつたる生命力に満ちあふれた北京、しかも揚子江に二重の鉄橋をわたし、武漢郊外には魔法のような工業都市を現出させる実力を誇示しながら、家々の台所はガスの設備さえ急がず、豆炭や煉炭の炊事であえて甘んじている首都のこれらの姿は、なにを造るにも経なければならぬさまざまなものを、いかにも賢く、また気長に乗りこえて行こうとする「過程」の、象徴の一つとされないのであろうか。

私の旅行もすでに一年と数ヵ月まえのことになった。人民公社、製鉄の飛躍、穂のうえに赤ん坊を載せてもへこまないほど厚いという稲の増産。最近のかかるニュースは、仿膳の会食の際陽諭笙さんと明の十三陵について語りながら、命ながらえてもう一度いつか中国を訪れる時があったら、現在の中国も一種考古学な存在になるかも知れない、と考えたのを思い出させる。これはいくぶん文学的な空想であるにしろ、二年足らずのあいだにも中国はまことにいち

日中兩國の親善、友好が東洋のみならずひろく世界平和に役だつことはあらためて説くまでもない。私はほんの個人的な気持からだけでも中国で親しい友だちになった人々を、自由にお招きされる日が来たらどんなにうれしいことか、とこのまえがきのペンをおくにあたり、そのおもいを一層強くしている。

一九五九年一月二十一日

野上弥生子

目次

まえがき

中国の南門・広州	一
北京・胡同の家	三
北京の監獄	八
大同と雲崗	一〇
延安紀行	三

黄陵——茶舗——廃都——楊家嶺——王家坪——棗園——
石の床の部屋で——女たちの洞窟

中国の南門・広州

一九五七年六月二日の朝、私たちは羽田からインド航空機による八時間の飛行のあと、九竜の空港におりた。国交が回復していて、まっすぐに北京へ飛べるなら五時間とはかからないだろう。しかしいきなり座敷にすわりこむより、門、前庭、玄関と通って個人の家の様子もわかるのだから、この不便も考え方では、「宿かきぬ人のつらさを情けにて、おぼろ月夜の花のした臥し」をたのしんだ蓮月尼の歌に似て、いっそ仕合わせともいえる。でなければ、この巨人の爪先きたる南の国境から、脊骨の粵漢、京漢の両線によって、しだいに北上しながら頭部の北京まで、大陸を縦断する機会はめったにえられないはずだから。

それにしても、表むきではまだ絶交である私たちの関係の悲しむべきはいうまでもない。一千万平方キロに及ぶ面積と、六億の人口と、三千年の歴史をもち、最大にして最古でありながら、なお且つ世界の最新の国として登場している中国に対して、外交的、政治的にそっぽを向いているのみでなく、その存在さえ否定する国があるのはなんと奇怪なことだろう。かかる不

条理こそ地上にあつてはならない。

九竜から汽車で一時間のると英国領の終点である。税関にパスポートを示し、向側の深圳で待つ中国の列車に乗りかえるまえに、中間のちっぽけな橋をわたった。国境ではどこでも行われる平凡な手つづきに過ぎない。にもかかわらず、ヨーロッパあたりの旅とは違ったひそかな緊張があつたのは、たんに国境を越えたにとどまらず、国連さえそれで動かされる一つの横車をもとび越したこと、なおいえば、そのために特殊扱いになっている国について来た、とおもう感動であつたかも知れない。

対外文化協会から迎えに見えた劉伯剛さんと王維平さんの案内で、私たちは駅の接待所でおひるをすました後、広州行急行の軟車にのつた。ともに連結された硬車は腰掛も木製のままであるのと違い、このほうはオリブいろのきれで張られ、かけ工合もよい。二、三等にあたるわけであろう。ただ区別がいかに漢文調になったところに、さっそく中国が感じられ、車内にも日本の列車にはないものがあつた。それは窓際の小さい方卓でのお茶の支度で、人数だけのガラスのコップが並んでおり、それも同じ数だけおかれた紙袋の葉茶をコップにあけると、藍木綿の制服のボーイさんが、上から熱湯をなみなみと注いでお茶ができる。ボーイさんの大やかんは四リットルちかくはいるだろう。かたちは西瓜のようにまるく、口は病人が使う吸い

飲みの恰好で長く突きだし、その一端をのぞいては、頭巾をかぶったようにきれで包まれている。保温もあるが、うっかり触れればやけどしかねないのを防ぐためらしい。ボーイさんはこの大やかんを提げては現われ、たえずコップを満たして歩く。茶の葉は底にたまっているから、そのたびに乗客は新しい熱い飲料をもつことができる。乾ききった中国の生活には、これではなくてはならないものとはあとで知ったことで、この時は、長いモップをもったボーイさんがたえず床掃除に來ると同じに、行きとどいたサーヴィスだと考えた。それ故また迂濶にもただかと思つたら、一袋単位で勘定をするらしい。マッチ箱ぐらいのこの小さい紙袋には、五年計画を繰りあげて遂行しよう、といった意味の標語が刷つてある。深圳の駅の電柱にも赤く塗った長方形の板に、「擁護和平共处的五項原則」の文字が彫られていたのが思いあわされた。

しかし、窓の両側には政治をも思想をもこえた自然が、亜熱帯の風光をただきらきらと繰りひろげる。バナナ畑、パイナップルの畑、パイヤの樹、火焰のような花で輝やく鳳凰木、亭々と広葉をかさねた桐油樹、まっ赤な仏桑華。水に浮いた水牛、そうして鮮やかな紅いろをした土。これらはすでに三十年まえになる台湾旅行や、また外遊の途次、シンガポールあたりで見たものをつぎつぎに追想に呼びおこさせた。ただ荔枝だライチと教えられた樹ははじめてであった。遠く眺めると蜜柑の木に似て、まるい樹形なりに葉が黄ばんでいる。樟木頭駅につくと、劉さ

んはいまが出盛りという実をひと抱え買って来てくれた。珍しいことには胡桃ほどの殻が、三センチぐらいな細い枯れ木めいた莖の先きに、一つ一つ串にさしたお団子のかっこうでついている。もとよりほんとうの実の内側に包まれ、殻は覆いに過ぎない。それが濃い粉紅と、お抹茶の緑をふりかけたようなまことに美しい色をして、地肌にはうろこ型の浅い刻みがつき、親指と人さし指で押せば、玉子の殻ほどもろく破れる。その殻いっぱい乳白色の穂なりの果実。口に入れると、甘酸っぱくみずみずとしてゆたかで柔らかで、たとえばよいほど美味しい。私たちはあとからあとと手をだしたので、茶卓には荔枝の殻のやまができた。これをなにより好んだ楊貴妃が、早馬でとりよせた故事も、そのあいだ話題にのぼった。しかし荔枝は採って一日たてば味がおちるとされ、北京の市場にも広州から飛行便でだすくらいだというから、いまの西安なる大唐の古都長安までとなれば、玄宗皇帝の權威をもつてしても、最愛の妃にほんとうにうまい荔枝は食べさせられなかったわけになる。

この沿線の一帯は、珠江下流のひよくなデルタだから、豊饒が果実に限らないのはいうまでもない。二毛作の稲は、すでに一番目の穂をつけるばかりに伸びており、場所によると水田がいちめんの池になっていた。私たちはそれが洪水だとはじめは気がつかなかった。そのうちに電柱が水から直立していたり、バナナの広い葉が水浸しになったりしているのを眺めるうち、

東京で英国の領事館にヴィザをとりに行った時、香港、広州間は、雨のため不通かも知れないと脅かされたのを思いだした。四、五日、雨がつついたのだという。しかし今日は、同じ空間から雨というものが降るか、と疑われるほどの晴れで、広州に近づくに従い、土地が高くなるかして氾濫した水も遠ざかり、しだいに丘陵があらわれた。もう郊外になるらしい。中腹にはアパートがならび、ひろい道路が走り、高い足場の上で工人たちが竣工を急いでいるところもある。すべてが赤瓦の屋根、黄いろい壁といった近代建築の聚落、その必要から切りひらいた山の、ほとんどまっ赤な土の断層、あたりの緑樹、花、碧空、そうしてまもなく迂りこんだ駅のプラットホームに、アーチ型にいく筋となく掲げられた赤旗、これらのどぎつく濃厚でみじんも軽みのない錯綜は、なによりまず中国の色感を教えてくれた。いよいよ北京入りをして故宮、景山、万寿山のごとき場所を訪ねても、すくなくとも色彩的にはこの第一印象に支配されたといってもよい。なおいえば、京劇の女形のまっ赤な頬さえいつも私の連想に浮かんでは、あの丘陵のくれないの土である。

愛群大厦にむかってひろいアスファルト路を駆けて行くと、一方に漫々とたたえた珠江の感じから、どこか大阪の町を通っているような気がした。夕潮で小麦いろにふくれた水がところ

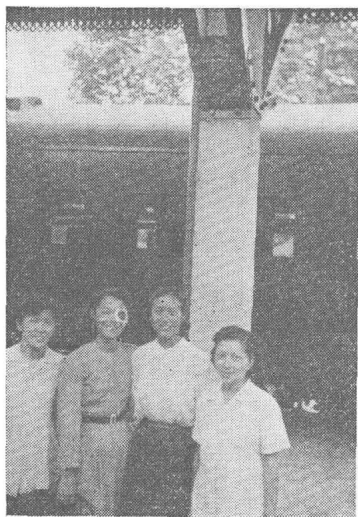
では道にあふれ、子供らが半裸体でぼしゃぼしゃ騒いでいる。子供らには限らなかった。男、女、おじいさん、おばあさん、と界限のすべての人間が、この岸边に集まったかと思われる人出である。きけば、今日は旧暦の端午の節句で、竜の船がでたり、競漕があったりで、その見物だという。長崎のベーロンの本家本元はこの辺なのであろう。

ホテルはあいにくの停電でエレベーターが動かず、十階までうす暗い階段をのぼらなければならなかった。しかし途中五階の一室で息をいれ、駅まで出迎えてくれた二人の若い女優さん、華南話劇団団長の郭雲英さん、同じ話劇演員の潘予さんとそのあいだおしゃべりしあったので、きめられていた部屋に落ちつくまで、私たちはすっかり仲よしになった。

郭さんは面長でからだつきもか細いが、潘さんは眼のくろっとした円顔である。中国風な刺繍がわずかに装飾的な白いブラウス、紺のスカートといった身なりで、紅、白粉の気はみじんもなく、潘さんの方はウェーブをかけているが、郭さんはあたまも引きつめで、私たちの概念にある女優さんとはおおよそ縁遠い。それでも郭さんは演劇学校で叩きこまれたひとであり、潘さんは幼い時から芝居の中に育ち、巡業では多くの地方にも行ったという。またこれは帰りに、ふたたび広州を訪ずれて再会を悦んだ時あらたに聞いた話であるが、私たちが延安行きをともにした西安の王琳さんが、あの洞窟の解放地区で演劇活動をしていたころ、潘さんも仲間

の一人であつたらしい。

話劇は京劇で代表される古典劇に対していえば、新劇である。彼女らはイタリアの喜劇や、ソヴェート・ロシアのものをよく上演し、いまは古典の勉強をはじめている。広州だけでも二百人の話劇演員がおり、劇場は三つある。なお、たいていの工場にはいつでも芝居のできる設備ができてゐる。収入はならし八十元（日本貨の一万三千円弱）、多い時には百六十から七十元になるという。おそらくこれは彼女らのような若い一般の俳優の所得であらう。後日学んだところによれば、中国の現在の税制は、私たちが日本で怖じ氣を震つて生きる所得税を、給料生活者には一切かけないですむ仕組みになっているのだから、——十八世紀に考えられた単税論に似た行き方らしい——えた金はまるまる手に残るわけであり、生活費の水準からしても、かなりよい収入といふべきであらう。とにかくその



広州駅にて（左から一人おいて潘予さん、郭雲英さん、陳蕙娟さん）

時はそんな話を、なにか女学生との討論のような調子で私たちは語りあった。正直なうちあけをすれば、そのあいだ二人の素朴な黒い顔を眺めつつ、メイキャップでこれがどんな変貌をするかに興味がたぶんにあったが、その機会には恵まれなかった。帰りに二度目に逢った時には、潘さんの方は児童劇にでており、シンデレラで好評を博しているふうであった。おお、美しいまま児の幸運が、この女優さんたちの仕事の上にもつねに恵まれますように。

そういえば、ホテルで陳蕙娟さんが待っていてくれたのは、私たちにもなかなかの幸運であった。陳蕙娟さんのお父さんの陳文彬さんは法政大学に学んだため、私たちにはいろいろ思いのある人であり、また最近の文通でむかしの親愛をあらたにして、長女の陳蕙娟さんは広州の中国国際旅行社につとめて、日本語とロシア語の係りだから、自分の家族では彼女が一番先きにお目にかかるだろうという便りも貰っていた。ところで私たちの家族からいえば、陳蕙娟さんにはじめて逢ったのは私たちではなく、これも中国のお招きで、物理仲間と二週間まえに先発していた次男のMであった。陳蕙娟さんは、彼があとに着く私のために書き残して托した手紙を、最初の挨拶とともにわたしてくれた。母親にはこんな些かな心づかいもうれしい。でなくとも、はじめての気がしなかった彼女への親しみには、不意な手紙の悦びに溶けあった。珠江にのぞんで不恰好にそびえた、灰いろの石の建物の十階の百五番室、二つの寝台、書き物

机、茶道具ののった小簞笥、と型通りの備品がさもホテルらしく事務的におかれた部屋が、窓際に腰かけて話しあっていると、いっそ家庭めいた和みを与えるのであった。

晚餐は劉さん、王さん、出迎えの二人の女優さん、それに陳蕙娟さんを交えて食べる。最上階のひろい食堂で、私たちの食卓だけは囲りを屏風でかこってあった。あとで大同に行った時にも出逢ったこうした特別な扱いは、かえって私たちの気持をまごつかせたが、現在の社会組織は組織として、むかしの中国のいわゆる「礼の国」としての伝統は、そのあいだにもなお厳しく守られるこれは一つの例なのであろう。

広州は喰い道楽できこえ、料理は種類だけでも四百に及んで、蛇まで食べさせる店があるというだけに、ほんのあたりまえのものに違いないホテルの料理も、たいそう美味しかった。こんなところも大阪に似ている。また今日の御節句のちまきも名物で、夕食にだしたかったのにいち早く売りきれ、ついに買えなかったとの挨拶であった。

最初の印象は旅人をいつまでも支配する。広州に大阪を感じた私に、なおもそのおもいを深めさせたのは、食後、部屋に引きとってからである。窓の下の珠江からは、たえず船つき場らしい騒音がつたわる。わけてもなにかの合図と見える鐘が、かん、かん、かんと響くと、それに答えて汽笛がぼうっと鳴る。ほとんど三分おき、五分おきにこれが繰り返された。暗い水の